

巻 頭 言

和文論文のすすめ

大森哲郎 日本精神神経学会理事
Tetsuro Ohmori

精神神経学雑誌の論文は、大別すると依頼論文と一般投稿論文に分かれるが、このうち一般投稿論文、なかでも原著論文の減少がときどきの編集委員会で話題となる。試みに原著論文を数えてみると、1998年から2009年までは年間3~8編(平均6編)に上るが、2010年以降は1~3編(平均1.9編)に減っている。

誠に由々しき事態であるが、和文論文の減少はわが精神神経学雑誌に限ったことではなく、他領域の学会誌でも問題となっている。例えば会員数1万人規模の日本リハビリテーション医学会では、和文誌の掲載論文数は2001年および2002年の年間51編を最大として、その後、減少し続け2009年は20編となったと指摘されている(Jpn J Rehabil Med, 49; 170-176, 2012)。ほかの内科系や外科系の雑誌にも和文論文の減少を憂える記事を散見する(日老医誌, 52; 1, 2015, 日本外科系連合学会誌, 41; 885-886, 2016)。どうやら医学界全体の動向とみてよさそうだ。

もちろん和文論文数の減少は論文数全体の減少を意味しない。和文が減った分、というよりそれに倍加する英文論文がさまざまな国際誌に発表されているのは間違いない。世界共通の土俵で勝負する研究者が、国際的な専門誌への発表をめざすのは自然な流れである。成果を国外にまで伝えてこそ学問の進歩に貢献できる。努力の末に何かを見出した研究者が、それが独創的であればもちろん、たとえささやかであっても、英文論文を優先する真情はよく理解できる。

だが、昨今の英文誌への論文発表への傾斜はそれだけでは説明できない面がある。いつからか学位申請は英文論文に限定する大学が増え、施設のランキング評価や研究費申請時の実績評価でも、ともかく英文論文が重視される風潮が強くなっている。最近、乱立するいわゆる「ハゲタカ

ジャーナル(predatory journal)」は、この風潮に乗じた営利目的の電子ジャーナルであり、投稿者から安からぬ投稿料を取って、ほとんど無審査で論文を掲載している。投稿者は、手っ取り早く英文論文の数を稼ぐというメリットに飛びついてしまうのであろう。ハゲタカジャーナルは極端な例だとしても、行き過ぎた英文論文至上主義は研究環境として適切とはいえないのではないだろうか。

和文論文を書いたことのない医学博士がすでにたくさん誕生し、これからも続くことが推察される。だが、精密に思考し表現するためには母語以上の言語はありえない。上質な和文論文を書く能力は、本来は英文論文を作成する能力の土台ともなるはずだ。医学界全体として、もう一度和文論文の意義と価値を考えてみるべき時期に来ているのかもしれない。

特に私たち精神科医は、社会と文化の影響を受けやすい精神疾患を、日本語による面接を通して診断し、日本語で患者に語りかけ、日本の法律と医療制度のなかで治療している。臨床に密着した論文では、和文でこそ記述の精度と密度が高まるし、日本の精神科医こそ最初の読者にふさわしい。

わが精神神経学雑誌は、約17,900名の日本精神神経学会の会員すべてに届けられている。それだけでなく2019年度を目前に、ほぼすべての記事を刊行1年後には無料で一般公開する運びである。そうなると精神科に関心をもつすべての関係者がアクセス可能な媒体となる。日本の精神科臨床を論ずるのにこれ以上の舞台はない。会員諸氏の貴重な見識や経験を、原著はもちろん総説、資料、症例報告、討論、あるいは会員の声として、もっともっと届けていただけることを願っている。